

“GOODBYE ISP, HELLO ISPRS”

(助)国立京都国際会館 営業部 上田 啓之

振り返れば、昭和58年春、会議第一課に配属替えとなつてしばらくの頃であつたろうか。ICS という会社の見積りを再見積りせよと、手渡された資料が ISPRS であった。東京大学生産技術研究所の村井俊治先生が来館され、KICH の経費がこんなにかかるとは思えないと相談があつたという。台帳を調べていると、会議の第二課に配属となった辻君が、実は、と言ってこれまでのコンタクトの状況を記したカードをみせてくれた。昭和57年2月の初旬、パシフィック航業（現パスコ）・アジア航測、国土地理院にコンタクト、東大生研の村井先生に照会すべしとのことで、村井先生にお伺いしてみると、ISPRS は、展示会が会議と同様に重要視される会議で、東京でする方が楽であるが東京には両者を兼ね備えた施設がない。日本開催の可能性については、1984年はブラジルで開催され、1988年に日本開催となると二度ヨーロッパを離れるため出展者がどう考えるかが問題。また、建国二百年を迎えるオーストラリアとの声もある。しかし、日本市場に対する出展者の期待感も高いということであつたようだ。

家内と私とは昭和57年に結婚するまで、企画調査課に勤務し、国際本部への会議開催アンケート調査を行っていたことがある。昭和57年1月8日付けの ISP（当時は、ISPRS でなかったようだ）会長 Frederick J. Doyle 氏の返信がある。家内が Doyle 会長宛の返信と送付資料を準備していたことは、こうなってみると因縁深い。

見積書を作って生研を訪れたのは、昭和58年6月であつたろうか。金額的には村井先生の予想通りの減り具合で、日本開催ならば京都という意向が強化されたように感じられた。会期が梅雨にあたることを心配すると、ホテル料金等参加者に有利な条件を設定するためのことと分かった。“会議屋さんは、すべてお膳立てをしますから、先生はじっとしていただいて結構である、とまるで私を王様扱いしてくれる。上田さん!会議とはそんなものですか?”とお尋ねになられる。“はあー、いやー。そういうわけには……”“そうでしょう。そうじゃないでしょう。ここは生研です。”“はあー?”“ポスター・セッションのブースなども自分達でつくり

ます。生研ですから材料と道具もあります。これから国際舞台に出る人は、何でも自分で出来なくては役に立ちません。若い人々に会議の運営を経験してもらうつもりです。ISPRS は古いヨーロッパの伝統と半パンツのアメリカ体質の二本建てで、これをなんとかするためには、アジアの代表として日本が活動するより他にありません。無償の調査活動を申し出ると、当初は警戒されましたが、アジア諸国もリモートセンシング技術の修得、人材の養成に力を入れるようになりました。”かくて、毎年アジア・リモートセンシング会議を開催してこられたという。何と、会議屋さん以上の会議屋さんである。

“会議場のことは上田さんでいいですね。展示は浅井さん、保税は木村さんですね。”“いざとなると、病気になる人がいますが、人間死のうと思って死ぬるものではありませんよね。私は死ぬ気でボートを漕ぎつづけようとして、ゴールに入った時気を失ったことが……。”半端じゃない。私は中央アジアの石窟にある仏像を想い浮べたものである。この村井先生にして藤野さんあり。呑気な私より、はるかに決断が早い。会議の準備はサブ・プログラム委員会で行われると聞き、一度委員会に出席させていただいたことがある。白日夢であつた。結果的には威力を発揮したこの委員会で、村井先生の意向を問ひ糾される役割を担った藤野さんは法難というべきか、余人に勤まったとは思えない。

法難ならぬ災難といえ、登録データの入力・チェックに動員された橋本・大野・越智・本多・スキットさんであろう。今となつては、如何なる災難も思い出のひとつである。Room552は、東海大学のパソコン工場であつた。パソコン技術集団とでも形容すべきサブ・プログラム委員会の土壇場での働きは、ディオニュソス神の加護を得て、すさまじいものがあつた。酒の神を引っ提げて次々と登場する役者の姿に、アシスタントも何かを感じ、共に燃えたという。

一社250m²合計1,000m²の出展が予定されていた四大商社の出展が、一社125m²そして49m²と激減したとき、これは国際問題になると思った。800m²減は3,200万円の減収であり会議の縮小を余儀なくするからであ

る。これを時勢のなせるわざと、違約金すら要求されなかった。結果的には、この穴は他社では埋められ、四大商社が四大でなくなり、ISP から ISPRS への転換が一気に計られた感があった。国際本部も、この手腕には“どきり”とさせられたことでしょう。“お金は自ら稼ぐもの、降って湧いてくるはずがない。ねえ上田さん？”京都で国際本部の役員会が開かれた時、東京で講演会を開催して経費を調達し、国際本部役員の人々にも講演料を支払われたという。

南アの出席者に対する日本政府のビザ発給停止に対し、コネツキー会長名で抗議電文が南ア日本領事館に送られた。NGO（非政府団体）の国際会議ならではの。この電文をリタイプした新人志村さんも、おそらく二度とは経験すまい。コンgress・ディレクターという役割は、国際本部に対しても、日本の組織委員会に対しても責任を負う二足の草鞋である。両者の利害は、意外に一致しないものである。そして、国際本部対応は人的にも、予算的にも具体化されずらいものであり、村井先生ご夫妻の個人的ご苦労がしのばれる。

婦人プログラムもこの例に洩れない。家内にもこっぴどく叱られた。どんな経緯があれ、各プログラムの内容がご婦人方に伝わっていないし、チケット販売デスクに人が居ない。何を打ち合わせて来たのかと。長

さんの奥様の思いも同じでしょう。独自の人間関係を駆使され訪問先をご手配された秋田さんは、あのお礼が大変であったことでしょう。しかし、“欧米の人々にはやけに親切で、アジアの人々には冷淡って事がよくあるでしょう。そういう対応をするくらいなら、何もしない方がよいてことあるでしょう？”とおっしゃられた村井先生の奥様の言葉が心に残ります。

圧倒的支持を得て、本部事務局長に村井先生、第4部会会長に平井氏が就任されたとき、中村先生をはじめとする組織委員会の念願が現実のものとなりました。次世代の人材は、サブ・プログラム委員会から輩出されることでしょう。予想通りの結果とはいえ、ご同慶の至りであります。同時に、路傍の夏草に、心のそよぎを覚えられた方も多いことでしょう。至りませぬところ、下田先生をはじめ、サブ・プログラム委員会の皆様の、温かいご支援を頂戴し、志村さん、アシスタントの人々、家内共々厚くお礼申し上げます。勝手ながら、酒乱を伴い身体は参っていましたが、気分は潑刺たるものがありました。信じ難い晴天、“お金をもらうと魂が腐る”との八木橋さんの倣成太鼓の響き。時空が曲がっていたのかもしれませんが。藤野さん
SEE YOU AGAIN!